寒山拾得

芥川龍之介

久しぶりに漱石(そうせき)先生の所へ行つたら、先生は書斎のまん中に坐つて、腕組みをしながら、何か考へてゐた。「先生、どうしました」と云ふと「今、護国寺の三門で、運慶が仁王を刻んでゐるのを見て来た所だよ」と云ふ返事があつた。この忙しい世の中に、運慶なんぞどうでも好いと思つたから、浮かない先生をつかまへて、トルストイとか、ドストエフスキイとか云ふ名前のはいる、六づかしい議論を少しやつた。それから先生の所を出て、元の江戸川の終点から、電車に乗つた。

電車はひどくこんでゐた。が、やつと隅の吊革(つりかは)につかまつて、懐に入れて来た英訳の露西亜(ロシア)小説を読み出

した。何でも革命の事が書いてある。労働者がどうとかしたら、気が違つて［＃「違つて」は底本では「違って」］、ダイナマイトを抛(はふ)りつけて、しまひにその女までどうとかしたとあつた。兎(と)に角(かく)万事が切迫してゐて、暗澹たる力があつて、とても日本の作家なんぞには、一行も書けないやうな代物(しろもの)だつた。勿論自分は大に感心して、立ちながら、行(ぎやう)の間(あひだ)へ何本も色鉛筆の線を引いた。

所が飯田橋(いひだばし)の乗換でふと気がついて見ると、窓の外の往来に、妙な男が二人(ふたり)歩いてゐた。その男は二人とも、同じやうな襤褸々々(ぼろぼろ)の着物を着てゐた。しかも髪

も髭ものび放題で、如何にも古怪な顔つきをしてゐた。自分はこの二人の男に何処かで遇つたやうな気がしたが、どうしても思ひ出せなかつた。すると隣の吊革にゐた道具屋じみた男が、

「やあ、又寒山拾得が歩いてゐるな」と云つた。

さう云はれて見ると、成程その二人の男は、箒をかついで、巻物を持つて、大雅の画からでも脱け出したやうに、のつそりかんと歩いてゐた。が、いくら売立てが流行るにしても、正物の寒山拾得が揃つて飯田橋を歩いてゐるのも不思議だから、隣の道具屋らしい男の袖を引張つて、

「ありや本当に昔の寒山拾得ですか」と、念を押すやうに尋ねて見た。けれどもその男は至極家常茶飯(かじやうさはん)な顔をして、

「さうです。私はこの間も、商業会議所の外で遇ひました」と答へた。

「へええ、僕はもう二人とも、とうに死んだのかと思つてゐました。」

「何、死にやしません。ああ見えたつて、ありや普賢文殊(ふげんもんじゆ)です。あの友だちの豊干(ぶかん)禅師つて大将も、よく虎に騎(の)つちや、銀座通りを歩いてますぜ。」

それから五分の後(のち)、電車が動き出すと同時に、自分

は又さつき読みかけた露西亜小説へとりかかつた。すると一頁と読まない内に、ダイナマイトの臭ひよりも、今見た寒山拾得の怪しげな姿が懐しくなつた。そこで窓から後（うしろ）を透して見ると、彼等はもう豆のやうに小さくなりながら、それでもまだはつきりと、朗（ほがらか）な晩秋の日の光の中に、箒をかついで歩いてゐた。

自分は吊革（つりかは）につかまつた儘、元の通り書物を懐に入れて、家（うち）へ帰つたら早速、漱石先生へ、今日飯田橋で寒山拾得に遇つたと云ふ手紙を書かうと思つた。さう思つたら［＃「思つたら」は底本では「思ったら」］、彼等が現代の東京を歩いてゐるのも、略々（ほぼ）無理がないやう

な心もちがした。

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：浅原庸子
２００７年４月13日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。